

【翻 訳】

1948年から1970年までの  
マンチェスター大学平和学専攻の学生達のための  
教育ならびにキャリア開発について  
(マンチェスター大学 アレン・C・ディーター博士) (2)

片 岡 徹

## 翻 訳

## 1948年から1970年までのマンチェスター大学平和学専攻の 学生達のための教育ならびにキャリア開発について (マンチェスター大学 アレン・C・ディーター博士) (2)

片 岡 徹

## 目次

1. 平和学プログラムの説明  
(Description of the Peace Studies Program)
2. 学修法について  
(Approach of the Study)
3. 1948年～1953年：形成期  
(The Formulative Period)  
(以上, 前号 (1))
4. 1953年～1959年：強化期  
(The Period of Consolidation)
5. 1959年～1965年：不安定期  
(The Period of Uncertainty)  
(以上, 本号 (2))
6. 1965年～1970年：再建期  
(The Period of Rebuilding)
7. 未来への提言  
(Recommendations for the Future)
8. 結論 (Conclusions)  
(以上, 次号 (3))

## [要旨]

本稿は、前号に引き続きアレン・C・ディーター博士による報告書の翻訳である。今回扱う時期は、マンチェスター大学の平和学プログラムにとって、その後の方向性を決めた時期であるとともに、初代平和学プログラム長であるミュアー教授が退職したことにともない、混迷を極めた時期でもある。この原本は、米国マンチェスター大学図書館アーカイブ室に保管されている。

### 4. 1953年～1959年：強化期

この時期における平和学プログラムの唯一と言って良い変更点は、大勢の教員陣による学科を超えた協力体制の元で開設された科目(interdepartmental cooperative course)であった。『恒久的な平和のための基盤』(Bases for Enduring Peace)は廃止され、『文化人類学』(cultural anthropology)が必修科目として加えられたのである。この時期の後半では分類については問題もあるが、私た

ちはこの時期の学生たちを「平和学を積極的に学んだと自覚する学生たち」とした。もしも彼らの平和学での学びがミュアー教授の元でなされていたのならば、この学生たちは「平和学専攻」という集団に位置付けられる。実際には、学生の中にはミュアー教授以後の教員の下で平和学の科目を履修していた人いたのである。

ある回答者が言うように、この時期に平和学プログラムのカリキュラムに変更があったことは明らかである。第1期と比べると少々

規模が小さいが、ほぼ全員の15名が『講読科目』(Reading course)を履修していたが、この時期の後半に学んだ学生たちは、ほとんど『平和の哲学』(Philosophy of Peace)や『平和創造と歴史哲学』(Peacemaking and Philosophy of History)を履修していなかった。7名から10名がこれらの科目を履修したが、同じ数の学生たちは『文化人類学』や『国際関係論』(International Relations)を履修していたのである。この時期には11名の平和学専攻があり、6名が回答してくれた。また、この時期に大学や大学院で履修した中で、実に優れた科目であると捉えている人が多かった。15名の回答者の中で、最も良い科目として、第1期と比較して『国際関係論』は4倍、『講読科目』は5倍の評価があった。しかしながら、第1期の6名とは対照的に、2名しか『平和の哲学』や『平和創造と歴史哲学』が最も良い科目だったと回想していなかった。

再度強調しておきたい点として、第1期の学生たちがそうであったように、ミュアー教授が大切にしていたことや彼女のパーソナリティに対しては、同じくとても肯定的であるという点である。回答者の多くが、現在の知的目覚めがミュアー教授の教えや人生観によるものであるとしていたのである。また、多くの学生たちが平和学プログラムの科目が自分自身の視野や人生観を大きく広げたと述べていた。「この科目を通して養われた考え方は、その後の私の思考に強い影響を与えました」というコメントのように、特にこの時期の学生たちが学んだ『講読科目』で使用した教材に関連して顕著となっていた。その他では、東洋の思想家に関する教材がその後の人生哲学に大いに貢献したと述べた人もいた。「それは西洋の遺産を適切な観点で捉えることに役立った」とある学生は述べており、またある学生は「すべての人間の基本的な諸問題は、すべての文化的な地域で見られる」と

悟ることに役立ったようである。「とても人生が豊かになりました」とある学生は述べ、「この学びを決して失いたくないです」とも述べていた。このように、ミュアー教授という個人的な影響に加えて学問的な姿勢もまた、この時期の回答者に影響を与えたといえるだろう。

大学院へ進む学生数はそれでも多かったが、その後大学院や牧師職(higher education or the ministry)へと進む学生がほとんどいなくなった。これは部分的には第2期では女子学生が多かったことを反映しているかもしれないが、これらの職業はしばしば男性たちに比べて女性たちが就く割合が少ないこともあった。平和学に関連した科目を二科目以上履修していた第1期の33名の中で女性が1名だったが、第2期には女子学生が7名となり、その中の5名が平和学専攻であった。第2期の学生数は33名で、その内11名が神学校へと進学したが、第1期では44名中、神学校へ進んだのは29名であった。第2期では、2,3名が大学院に進まなかったが、5名が物理学、化学、社会学、医学の分野で博士号を取得し、4名がスピーチ・コミュニケーション、経済学、教育、現代言語の領域で博士号候補者となっている。先述した大学院の他には、コーネル大学、ニューヨーク州立大学バッファロー校、マサチューセッツ大学、テネシー大学がある。第2期の3名は、現在ではブレズレン教会の大学(Brethren colleges)で教えており、2名が州立大学で教えている。このように、多くは学術的な科目を中心に履修していた第2期が、マンチェスター大学を卒業後に取得した学位や大学院での在籍数から判断すると、第1期と比べて少ないことは明らかである。また、より多様な大学院や職業を選ぶ傾向が第2期の学生たちに強かったことも明らかであり、そして教会関係に進む数は少なかった。本調査ではこのデータが読み取れないの

だが、住所録や卒業生の記録を通しては活用可能である。これら過去の学生たちが更なる学びのために大学院へと戻ることは可能であるが、ほとんどが現在の教育レベルで十分な職業に留まるだろう。その職業としては、牧師職や全てのレベルの教員職に加えて、図書館員が2名、アパラチア社会医学サービスセンター（Appalachian social and medical service centers）の長が2名、教会の医師やその妻、米国公共健康サービスの医師、脚本家、そして教会組織の中で3名もの中心人物を輩出している。第1期の10名以上の学生については、教育や牧師職以外の職業における数とほとんど同じ数となっている。例えば、教会役職者が3名、気象学者が1名、学校経営者が1名、企業の人事マネージャーが1名、同胞のための共同協会（communal Society of Brothers）に数名、保険事業者が1名、そして長年に渡る国際ヘッファー・プロジェクト（Heifer Project）という国際開発機関である民間福祉機関の役職者が1名、となっていた。

この時期から得られた15名の回答者によれば、9名が大学院のための準備をするのに十分適切であったと述べており、1名が特に際立っていたと述べていた。2名は大学院進学のためには十分な準備が出来なかった、と述べていた。別の1名は大学院へ進んでいない主婦である。また、8名は現在の職業と自分たちへの平和学による影響は何ら関係性がない、と述べた。数名は職業選択の際に平和学プログラムが役に立ったと述べていたが、8名は学生たちが更なる教育機会や各自の職業領域における水準という観点では十分に教えを受けられなかったと述べていたが、6名は十分に受けたと述べていた。この6名の内、2名が医学校へと進学し、そして4名が牧師の道へと進み、最終的にはその1名が大学において宗教学を教えるに至った。もしもすべての時期のすべての学生を対象に調査をする

ならば、改善が必要とされるべき点で最も強い感情は、職業に関する面談や情報の提供に関連すること、ということになると予想される。この時期における数多くの学生たちは職業選択を行うことが難しかったと感じており、後に在学中には考えていなかった仕事に就くために更なる教育が必要であると考えていた。職業に関する面談における改善のための提案は、本報告書の最後でも述べられる。

学生達に平和学の科目を履修するように推奨するという観点では、第1期よりもこの期の学生たちによって平和学プログラムを強く推奨する声が大きかった。15名の回答者の内、13名が平和学の科目を推奨する、1名のみが推奨しない、と述べていた。ある者は、女性として平和学が提供しなかった市場におけるスキルを身につけなければならないとコメントをしていた。5名は平和学を専攻するように激励すると述べ、7名は他の専攻と一緒に平和学を専攻することに賛同していた。このように複数の専攻を一緒にすることについて、この学生たちが卒業後の1960年からは平和学プログラムも推奨し始めた。5名は専攻を複数持つという状況でも特定の環境にあるならば薦めるかもしれないと述べていた。4名は専攻としては薦めないと述べ、そして1名は他の専攻と合わせるとしても薦めない、と述べていた。

改善すべき内容で推奨されていたことの一つが、対人間紛争解決の場面や平和的ではない人や筋が通っていない人と出会った際に、必要となる実践的なスキルを身につけたい、ということであった。全体的な印象としては、特に社会的な関心という観点でさほど学問的な内容に関心を示す集団ではない、と言える。この集団ではまた相対的に敬虔に関して関心が高くなく、その証左として教会に関係する職業に就く数が少なくなっている。

ここで再び述べるが、このグループにおける回答者たちは、友達や教員、両親を含めた

他の大人たち、または科目内容や課外活動と自らに対する影響を区別することが難しかった。様々な回答者たちは、多種多様な影響がお互いに強化を与えたが、その方向性は大学入学前に既にそうになっていた、と述べていた。マンチェスター大学における教員との生き生きとした個人的な関係は、再びここでも回答者の多くによってとても重要であったとみなされていた。何名かは幾つかの平和学の科目を通して得られた「形式ばらないという価値」(the value of informality)、特にミュアー教授の家で時折開催されていた『講読科目』についてコメントをしていた。多くの学生たちはミュアー教授のパーソナリティと関心事、そして授業の中で自由に議論をするための環境を作る能力による影響についてコメントをしていた。数多くの回答者は、特別なスピーカー(3名がヘンリー・ヒット・クレインに言及していた)、リエマン教授との交流(3名がミシガン大学のケネス・ボールディング教授によるクエーカー教徒やメノナイト教徒との交流に言及していた)、特別な会議や2名が特に言及していた『宗教強調週間』(Religious Emphasis Week)という意義に感謝しており、きわめて肯定的であった。

特定の科目や平和学プログラムの方向性に対するこのグループの回答者は、『講読科目』で扱った偉大な書物を使った方法について、その内容の充実さと幅広さへの感謝について数多くのコメントをしており、熱中していたことを示している。その一方、『文明の哲学』という科目の中で重要な内容と位置付けられていた『歴史哲学』については賞賛と批判という相反する評価であった。トインビーやソロキン等を分析したり一般化することは、数名によって疑問を呈されていた。平和を創る人々を分析する際に系譜を強調することは、12名の内半数以上によって温かく受け取られ、そして3名によって慎重に疑問が呈されていた。第1期のグループと同様に、

何名かは賀川豊彦やガンジー、バンチのような人物が平和を創り出す者としてどうあるべきか、平和的な変化は可能であるという証拠や、または個人的な平和学を創り出すもののヒーローを考える源であるとコメントをしていた。2名は神格化する危険性について指摘していた。

このグループの数名は、現在の考え方が大いにマンチェスター大学、つまり出会った先方や平和学プログラムの産物であるとコメントをしていた。ある学生は、「目標や哲学を含めて、もしも私が別の大学を選んでいたら、私の全人生は全く変わったものであっただろうと感じています」と述べていた。このような言及は第1期のグループによる回答でも見られたが、割的に第2期のグループの数が勝っていた。

上記のような数多くの証言を引用したが、その一方で、ある平和学専攻のコメントを紹介することで、全体像をとらえる上で手助けになると考えている。

「私は、友人や家族、そして一緒に働いている人などとの個人的な関係を解決する方法よりも国際問題や紛争の扱い方について多くのことを学んだと思います。私は、自分自身の哲学が大いに影響を受けたのか、確信が持てません。恐らくは私の理想の幾分か、または考え方が強化されたのだと思います。私は1年生の時の『ピース・セル会議』(peace cell meeting)に参加して、そして平和学専攻の学生達や私たちの教授陣、そして『絶対平和主義者たち』(pacifists)が抱えている基本的な教義について、個人的な疑義を感じたことを覚えています。ただ、その時にはこれらについて何も言いませんでした。その後になってはじめて、私は自分自身がそれまで育まれた理想について基本的な疑義を数多く持つようになったのです。私は平和学という環境の中で、それらを育ててきたとは考えて

はいません。私がそうするように激励されたのか、確信が持てません。私は、事実や著者の立ち位置や考え方について数多くの思索を重ね、そして学んできました。私はこのことを私という人物の中に統合しようとはあまり思いませんでした。すなわち、現実主義的に怒りを扱ってはいなかったのです。つまり、それは人生の通常な一部であり、またそれを表明しなかったり無視されたりするよりは、むしろ扱わなければならないのだと思います。私は、高尚な考え方や平和創造という大変な取り組みと、先生を喜ばせて議論には参加するが、しかし実際には心の中で詐欺師であると考え、しかも自分自身の問題を扱うことが出来ない際には他人の問題を解決するにはあまり適していない、と考える知的な学生としての自己認識との間にあるギャップに橋渡しをする必要があったのです。このように、私はその当時にはこのような感情を持ったことを覚えているのですが、しかし私は現在の自分自身の考え方では、これが分からなかったのです。もしも分かっていたら、私はそれについて何かをしたかもしれません。私は信念という点についてミュアー教授に聞いたかどうかどうか覚えていません。私はただ彼女の意見を受け入れるべき『宣言』として、そしてしかも私は『当然信じるべきで、同様に感じるべきものである』と受け入れていたのだと思います。もしも私たちの意見が一致していなかったら、『私の』考え方に何か間違いがあるに違いない、というように。」

この考え方は別の側面を呈している。つまり、第1期、第2期による3名の回答者は、平和学プログラムの評価において全くもって肯定的には捉えられなかった、という側面であった。

## 5. 1959年～1965年：不安定期

ミュアー教授は母親の体調が優れず、更なるケアが必要であるということを経験し、1959年に早期退職をした。平和学プログラム長としてミュアー教授の復帰という現実的な可能性はあったのだが（実際にミュアー教授は1963年から1965年にかけて、強制的な退職年齢の前ではあったが、一人の教員として実際に戻ってきたのである）、1961年度にシュール教授が平和学プログラム長に就任するまでは、その地位には誰も任命されなかった。この時期にはほとんどの平和学の科目は開講されることもなく、他の専攻の枠内で学びを終えなければならなかった。その理由は、平和学を担当する教授陣は、平和学を教える際に担当科目数で負荷がかかっていたからである。ディーター教授とシュール教授が平和学の学生達に教え助言を与えた期間のことであるが、1963年度に平和学プログラムの見直しを行い、そして1965年の秋に紛争解決の導入に力点を置くことと決めるまで、平和学の学生達に注意を払うことも時間を割くことも出来なかったのである。二人はピース・セルのグループと共に手を取り合い、学生達を学外の平和に関する会議に連れていった。

1959年から1965年というこの6年間には、13名の学生しか2科目以上を履修していなかった。その内5名が平和学専攻であり、その中でも3名はミュアー教授が最初の退職前に平和学専攻として学んでいた学生である。これら13名の学生たちは、更なる学問の学びへと進んでいった。2名はロックフェラー神学校の奨学金を得た。ブレズレン教会の会員たちは、一人を除いてすべて当初はブレズレン教会ではない神学校（ハーバード大学、シカゴ大学神学校、近東研究神学校（バイルート）、太平洋宗教学校（カリフォルニア）、アーラム大学宗教学校）へ進んだ。7名が神学校へ進んだが、その内3名は1年ないしは1年

以内ではあった。現在では、1名が牧師となり、もう1名は病院のチャプレンをしている。また別の1名はレバノンのベイルートにあるアルメニア正教会のための社会行動と研究に関して長を務めており、スラムに関する社会的な研究で博士号を取得することを希望している。また別の者はハーバード大学で中国研究に従事して博士号を取得しており、今年の秋からは、ある州立大学で教え始める予定である。別の者は医学博士号を取得し、研修医として専門プログラムにいる。また別の者はコロンビア大学において国際関係の領域で博士号を取得し、プレズレン教会の大学で教鞭を取っている。そして、ある者はカリフォルニア大学ロサンゼルス校においてアフリカ研究を1年終え、そしてある教会で牧師として5年務めた後、使命を遂行するために出発しようとしている。別の者は高校で教えている。3名が女性であり、その一人はラジオ局で働いている。この学生達の内6名は海外でのボランティア活動や、ポーランドや台湾、日本、オーストリア、レバノン、キプロス、ドイツ、ナイジェリア、チリにおいて1年から4年という期間で海外の教育プログラムに従事している。

この学生達の半数以上がミュアー教授に教えられていたことから、ミュアー教授の退職が学生達の経験に何を意味したのかについて注目することは興味深い。平和学プログラムで教えるためにマンチェスター大学で戻って来た、政治学で博士号を取得した平和学専攻の学生は、このように述べている。

「私はミュアー教授がいた間の方が平和学プログラムは成功したと思います。彼女の教えと存在そのものが、学生達に自分自身の哲学を発展させるのに役立ったからです。しかし、それ以降は、私には平和学プログラムが個人的な哲学的な問いへの関心を薄め、より伝統的な学問へと没頭しているように思えるので

す。たとえ平和学プログラムが多領域の学問から構成されるアプローチを採択しているとしても、その遂行のためというよりはむしろ、これはほとんど個人的な哲学的な問いを促すことを犠牲にしているのです。ほぼ不可避免ながら、平和学プログラムからその要素を引き離すという試みは、平和学プログラムが個人的な哲学とは関係がないものとなり、そして熱心な学生達にとって興味を失せるものになり、さらには学生が自らの問題として考える対象とはならなくなったのです。多様な考え方を持つ人々に平和学プログラムを開放し、そして一人の教員と共にあるという状態から自由にする、というよりはむしろ、この試みは深く関わろうとした何名かの学生を失うことに繋がり、平和学プログラムが更に繁栄することを妨げてしまったのです。なぜならば、教員の中で大学教員の人生において最優先事項として平和学を位置付ける人が一人もいなくなったからなのです。」

上記のようなコメントの影響力は、現在は博士号を持ち、海外のいわゆる「鉄のカーテン」の両地域において奉仕や教育に3期に渡り過ごした別の学生に注目する時、特に激しさを増すのである。

「2年生の後半の時期に私を医学部準備課程から平和学へと変えたものは、特にどの科目ということでもなく、それはむしろミュアー教授による生き様と学問上の真剣さ(the integrity and scholarly seriousness)だったと思います。私は3年生の時に東京で1年間を過ごすように励まされました。そこで私の現在の専門的な学びが始まったのです。それはまさにミュアー教授の影響によるもので、私の平和学専攻としての重要な学びを構成した履修科目は、実は二次的なものでしかありませんでした。それは方向性であって技術ではありません。価値であり人間性で

あって、私の現在の方向性に活気を与え続けている社会科学ではないのです。』

「皮肉にも、今から振り返ってみると、それは素朴かつ感傷的なものであり、とても限定的であったために学生に意味のある専門的な訓練を与えることが出来ない原理原則だと感じている。しかしながら、その後どんなにか私の思考に大いに変化をもたらしたであろうか。ウィルソンやガンジー、シュヴァイツァーは、私の中で生き続けているのです。シュヴァイツァーやガンジーへの遅き怠惰な目覚めは、ミュアー教授によって期待されていたことなのです。彼女は聖人研究(hagiography)に傾倒していたのです。』

しかしながら、聖人や英雄への崇拜を励ますことの危険性について認識をしてはいたが、この平和学専攻の学生はミュアー教授が「大い私に影響を与えた」と再確認しているのである。

このグループの学生たちは、ミュアー教授や他の教員、そして当時の平和学プログラムの理解と批判という両方の点において大変正確であるように思われる。現在は牧師をしている別の平和学専攻だった学生が言うには、平和学は「私を平和に対する神秘的かつ理想的なアプローチを採ることを促した。私はそれについて、恐らくは後に幻滅を感じるだろうという恐れと格闘しているのを実感していたのです。それを感じていた人も数名います。そして、そのもがきは良いものでした。東洋の古典は私が精神的にそして知的なることを矯正し、そして私の思考の引き立て役として手助けしてくれました。ミュアー教授が『歴史哲学』に関して教えている間に、パーク教授はそのような実証主義的ではないロマン主義をあざ笑っていた」のであった。彼は、ある内容についてかなり批判的であったが、異なる見解を自分自身に与えるという緊張感に

ついては肯定的であった。考え方に衝突を与えるという点で成長や思考を育んだのである。ミュアー教授の後に平和学を継承した教授陣は彼女の知的な関心事や判断事をほとんど共有しなかったため、変化の時期を過ぎた平和学専攻の学生達は、平和へのアプローチや仮説の設定の仕方について、もがかなければならなかったのである。一つないし二つほどの例外としては、ミュアー教授の考え方の多くは消え失せてしまったが、晩年になっても彼女の影響力は強く続いたのである。他の教授陣の影響力もまたこれらの学生達には強く及ぼされ、7名は具体的な氏名を記載していた。

回答をしてくれた8名全員は、それぞれの人生を方向付けたり、または再び方向付けたりという恩恵を感じている点で力強く平和学プログラムを支持してくれている。5名が大学院への準備に十分役立ったと述べ、そして2名が動機づけを得たことや重要な問いに目を向けさせられたことは他の技術的な学びよりも適切であったと述べていた。牧師であり結婚相談員である者は、この秋から更なる学びへと取り組む予定である。ある者は6年に及ぶアフリカでの平和部隊(Peace Corps)での経験や米国における教会での若者支援、そしてオーストリアにおけるブレthren教会ボランティア・サービス(Brethren Volunteer Service)を経てちょうどこの秋に大学院に進む予定である。

初期の学生達の多くはボランティア活動をしたり中には海外で短期間の教育経験を積んだりした一方で、割合的にこのグループではさほどそうではなかった。この13名の内で8名は既にそのような経験を持っていたり、これから参加をして海外において働いたり教育に関わろうとしている。年齢でいえば、27歳から32歳となり、6名が23年という海外経験を持っている。このようにして、私たちはこのグループを、強い学問への動機づけ



と広い現場での経験を持つという意味で第 2 期よりもはるかに多く、そして第 1 期よりも幾分か見ているのである。

再びであるが、このグループではプレズレン教会との強い一体感を持っているのである。現在では 4 名しかプレズレン教会やその関連施設に雇われていないが、一人（主婦であり学校教員である）を除く全員がボランティア活動かプレズレン教会のために専門的に働いているのである。

8 名の回答者の内 4 名は個人的な面談をしなかったと述べ、2 名は無回答、そして別の 2 名は少しは面談をしたと述べていた。何名かの者は個人的に面談をする機会を平和学プログラムの中でとても重要な部分とすべきであると述べていた。何名かの者は職業のための面談と個人的な面談への対応とを関連付けて考えていた。5 名はほとんどないしは全く職業や大学院進学に関する助言や支援がなかったと述べていた。ある者はそうして欲しいと思っておらず、また別の者は助言に耳を傾けなかったことは自分自身の過ちであると述べていた。ある者は、とある教授が高校教員になることを持ちかけてきたものの、ほとんど関心を示さなかったためにすぐに撤回したと述べていた。また、ある者はロックフェラー奨学生を目指すべきと言われたものの、学部長 (the Dean) が大学院へ進学するには力量が十分に備わっていないと言ったようである。しかし、彼は奨学生となってハーバード大学で神学を学び、現在は牧師職に就いている。

「卒業後の職業機会について私たちの卒業生が十分に準備をして重要な職に就けるようにするために、どのような提言をお持ちですか」という問いに対して、幾つか興味深いコメントを得た。

「専門教育の重点化の時代にあって、私は公式上の学位取得と連動して、個人の学問領域

に特徴づけられたジェネラリスト・アプローチや柔軟で流動性の高い人生設計の必要性を感じています。私たちは自らの職業を創造したり自分自身の学問体系をデザインしたりするというリスクに対して、ひるまない勇敢さを持った学生達が必要なのです。」

何名かの学生達は、私たちが平和創造の職業がいかにあるべきかに関して、更に広い概念に対してより開放的でなければならぬと指摘した。ロシアで長く地域研究に取り組んだ卒業生はこのように述べている。

「米国国際開発局や国連など、外交に携わる仕事が、私が平和創造に関連して考える最も主要な職業であった。現在では、私は市民権や市民の自由に関する法実践や平和と正義に関する学生運動、ペルーの山々で働く医師、市内で働く聖職者たちや地方のスラム地区で働く人なども更なる平和創造の職業だと考えます。」

かつては政府で働くことを考えていたが、現在は教職の地位にある別の卒業生は、こう述べていた。

「『重要な職業』は、私たちの国の目的や政策によって決定づけられた状態であるかもしれませんが。この国が平和創造に対して献身的な人々を本当に必要とするようになってはじめて、学生達は平和のために運動や学校教員のような他の職業を通して働かなければならなくなるでしょう。例えば、政府は物静かな良心的兵役拒否者であった人を外交や安全保障の領域で雇うことを嫌がるでしょう。もしも平和学プログラムが外交に従事する人のために準備をするようデザインされたならば、それはほとんど必要ないと思います。」

3 名の学生達は、大学院進学のための教授

陣による更に積極的な関わりがあれば大変手助けになると述べていた。その中の1名は、3年間ポーランドにブレズレン教会ボランティア・サービスの下で交流ボランティアをしていた。農業訓練大学において英語を教えたり世界情勢について議論をしたりしたことは、彼の後の博士課程（現代中国史・古代語）にとって大変重要であったという。その経験は、彼が文化的障壁を超えてコミュニケーションをする際には何が必要であるかについて考えるのに役立ったのである。この時期の5名の平和学専攻の学生たちの内で3名はマンチェスター大学で最初の2年間は科学を学んでおり、そこから平和学専攻へと変えた人たちであった。このことは他の時期でも時折起こるのだが、このグループでは割合がかなり高いように思われる。平和学専攻ではなかったある学生は、一学期間ロックフェラー神学校の奨学金を得た後、科学の領域に戻り、そして医学博士を取得した。

8名の回答者の内6名は、学生達に平和学の科目を取ることを推奨するだろうと述べ、そして一人は個々の学生に注意深く自分の人生においてしたいことに照らして助言をするだろうと述べていた。「なぜ推奨するのか、しないのか」という点については、「それはわくわくするから (it is exciting.)」と述べていた。3名は平和学プログラムが平和への理解と関わりに関して、広がりや深さを育むために有効であると述べていた。何名かの者は十分に学生の面倒を見てくれたと述べていた。そして回答者の全員が、平和学専攻を他の専攻と合わせて学ぶことを推奨するだろうと述べていた。ある者は他の専攻と一緒にしないかぎり薦めないだろう、と述べていた。数名の者は6回以上ボランティア活動に取り組み、そして第二の専攻を持つことが適切であると考えた。ある者は数多くの学生達が平和のために身をささげることの重要性を感じる中、それがつまらない (trivial) と感じる

ようになった時に大学を離れるだろうと述べていた。

どのように平和学プログラムの学びを改善すべきか、という質問に対しては、2名は政治学や経済学の科目をもっと取りたいと述べていた。その1名は平和学専攻であり、もう1名はそうでなかった。別の2名はより積極的に自分自身の人生の目標や人生設計について取り上げるべきであると述べた。しかし、ある学生によれば彼女はそうされなかったことに感謝していると述べていた。平和学専攻ではないある者は、都市問題への関わりが十分ではなく、また自分自身の経験が本当に力強いものとなるような外部との影響が十分ではなかった、と述べていた。別の者は、学生による行動プログラムをもっと持つべきだと言い、また別の者は現代の問題や意思決定過程を理解するために、より集中的な科目があるべきだと述べていた。

このように、二つの専攻を持つ学生達が強い関心を示したように、現代性、積極的な関わり、学びの幅広さと広い世界を射程に入れた観点 (contemporaneity, active involvement, breadth of studies, and world-wide perspective) が将来の平和学プログラムの成功のためには重要な要因となっている、とこのグループは考えていたようである。

特定の科目や学んだ教材に対する反応を私たちが要約するならば、最も強い肯定的な回答は文化史に関する『講読科目』（履修した7名の内6名が際立って素晴らしい、と述べた）と『平和創造の原理と手続き』（5名の内4名が際立って素晴らしい、と述べた）であると言える。『国際関係論』を履修した4名の内、2名が例外的に役に立ったと述べた。この時期では、この『国際関係論』は3回シリーズへと拡大された。1回目は国際政治について、2回目は国際法について、そして3回目は国際組織についてであった。2名の学

生が3回すべて履修し、1名が2回履修した。現在、牧師を務める者は、パーク教授の元でこれら3回を履修できたことは特別な喜びであったと述べていた。

4名は『講読科目』の中で出会ったものが大きな影響を与えたと述べていた。「リベラル教育を真の意味でリベラルにしたものが、あれらの教材ではなかっただろうか」とある者は感謝をして述べていた。ある者は「東洋の古典は私たちに現在の中国やアジアについて多くのことを教えてくれないため、より現代的な内容を盛り込んだ教材とすべきである」と述べていた。4名は、著名な平和創造に従事した人々の働きや考え方が重要であるだけでなく、自分たち自身への問いかけも重要であると感じていた。平和学専攻ではない2名によれば、より大きな歴史という運動においてソロキンやトインビー、シュバイツァーの理念はとても視野を広げるものであり重要であった、とみなされていた。一方で、ある平和学専攻の学生は幾分かはそのに価値を見出していた。2名の学生は「対象となる領域が狭すぎるために、より幅広い歴史哲学の思想家たちに授業の中で触れさせるべきである」と述べていた。数名は最近の科目におけるより幅広いアプローチに対して肯定的であった。このグループの学生たちにとって、特定の書籍に加えて何が読むのに適した書物であるかについて幾分かより強い同意があった。恐らくは、以前のグループよりもこれらの書籍に親近感を感じていたためであると考えられる。

どのように平和学での学びが現在の職業で活かされているか、という問いに対する回答では、幾つか興味深いコメントがあった。

「(ある主婦の方より) 一連に及ぶ平和学での学びは、私に世界は想像以上に広く、そしてこの部屋や街や、そして家族よりもさらに壮大である、という永続的な気づきを与えて

くれました。子どもの福祉に携わっている間、私のすべてのアプローチは、この気づきによってなされ、そしてまたミュアー教授の人生や科目が私たちに教えてくれた「尊敬」(reverence) という概念によって色づけられていたのです。」

別の者は、こうも述べている。

「哲学／神学と国際関係論という私の二つの学びはマンチェスター大学で花開いたのでした。これは創造的な緊張関係にあります。私は職業上の目標を神学校の最終学年を終えるまでは決めることが出来ませんでした。このような私の古き平和学での学び(個人的な哲学実践と国際的な関わり)」という二重の考え方は、私を未決定と緊張に置いたのでした。しかし、これが良かったのです。平和学は、もしも私がロシア研究のような国際関係論の領域に行っていたならば、もっと「勝利を勝ち取った」ということになっていたことでしょう。牧師職という私の決定は、ミュアー教授の考え方を受け入れてのことでしたが、彼女の神学体系は受け入れがたかったです。私は文化的にも人種的にも様々な教会に仕え、そして近隣地域で積極的に教会に関わってきました。私は社会サービスや国際的な関わりへと容易に変更することも出来ました。しかし、最近になって私は将来には受けるかもしれませんが、ある海外でのポストを断ったのです。平和学で学んだことが、牧師職をより創造的に、そしてわくわくするものにしたのです。シカゴにおけるアフリカ系アメリカ人コミュニティ組織における私の積極的な関わりは、部分的には平和学での学びや関わりへと起源を追うことが出来ると思います。」

この人の言葉は、この時期の回答者の多くが持つ感情をよく表している。国際問題のみ

ならず、社会への奉仕や国内の諸問題の両方により強い関心を示し続けているのである。当面の間は少なくとも一つの仕事に従事するのが大多数にもかかわらず、職業選択についてはいまだ幾分か色々な選択肢に開かれていて柔軟性があるように感じられる。平和学プログラムは関心や動機づけという意味では今でも妥当性があるように思われるが、しかし数多くの特定の考えを教える科目は廃止されてしまった。初期のグループの意見や職業と比較すると、このグループは、いまだに創造的な緊張や変化の中にあることが見て取れる。宗教的な動機付けや姿勢はまさに現実的ではあるが、しかしむしろ異端であるが決して偽善的なものではない。以下に述べるハーバード大学の公衆衛生トレーニング上級プログラムにおいて医師をしている学生からの遠距離電話は、このグループの感情を表している。彼はちょうど休暇から戻ってきたばかりであり、もしも質問紙への返答が遅くなったとしても役立つであろうか、と尋ねてきたのである。「質問紙に記入するという大変な作業は、私の思考において何がいまだ定まっていないのかについて考えるのに役立ちました。私がマンチェスター大学を卒業してからも、なおいっそう様々な関心を持ち続けていることがよくわかりました。」

(参考ウェブサイト)

Brethren Service Center

<http://www.brethren.org/brethrenservicecenter/> (最終アクセス日：2018年11月5日)

Heifer International

<https://www.heifer.org/> (最終アクセス日：2018年11月5日)